

支援対象を喪った後、社会福祉士はどう在り続けてきたのか？**ー地域包括支援センター職員の語りを通じてー**

○ 川口市横曽根地域包括支援センター 奥山 洋祐 (009993)

[キーワード] 支援者の悲嘆、地域包括支援センター、混合研究法

1. 研究目的

我が国の総人口は2008年をピークに減少に転じた。人口推計によれば高齢を迎えた老年人口はこれから急激に減少していくとされている。

地域包括支援センターは高齢者を支える相談機関のひとつである。今後我が国がいわゆる「他死社会」を迎えるにあたり、センター職員が利用者の死に触れる機会が増加することは必至といえる。だが国内外ともにソーシャルワーク領域において先行研究は乏しく、支援対象の喪失が職業継続に関わる多大なストレス源であるにも関わらず、支援者にどのような支援が必要かは明らかにされていない。そこで本研究では、地域包括支援センターの社会福祉士が支援対象を喪った後でどのようなプロセスを経て支援者で在り続けることができたのかについて明らかにし、社会福祉士の職業継続に寄与することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究では調査対象を、地域包括支援センターに社会福祉士として登録されている者とし、他職種として配置されている者は除外した。調査対象者は東京社会福祉士会調査・研究センターに協力を求め募ったほか、知人の紹介を通じ募集した。

調査対象には調査に先立ち基本的な属性を確認するための事前質問票を送付し、調査への同意が確認できた後に回収した。調査ではインタビューガイドを参考にしながら半構造化面接を行っている。インタビュー内容は録音し逐語録を作成した。

本研究は仮説形成を目的とした質的帰納的アプローチとし、質的帰納的分析と計量テキスト分析を併用する混合研究法を用いた。分析にあたり、質的帰納的分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用し、計量テキスト分析にはKH Coderを利用した。

質的機能分析では、記述についてオープン・コーディングを実施し、ヴァリエーション（具体例）と定義に基づき概念を生成した後に、概念同士の類似性および対極性に基づいてサブカテゴリーおよびカテゴリーを生成、カテゴリーをその内容に沿って検討しグループ化することで、中心のカテゴリーを概念化した。

計量テキスト分析では、データをKH Coderに投入し、データクリーニング後主要語を抽出し、次に構成概念を抽出するため出現頻度が2回以上の主要語から出現割合を集計し、クラスター分析を実施し書くクラスターを構成する主要語と逐語との関係性をコンコード分析することで、クラスターに構成概念を命名した。

最終的に質的帰納的分析により得られたカテゴリーと、計量テキスト分析で得られたク

クラスターを比較し、内容の検討を行った。

3. 倫理的配慮

調査参加者には事前に調査内容について十分に説明の上、調査協力への同意を得た。本研究に関する個人情報には完全に匿名化し、調査によって得られたデータは一定期間の保管後削除した。本研究は武蔵野大学通信教育部研究倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号 21-09）。なお、本研究に開示すべき利益相反関係はない。

4. 研究結果

20人が最終的に調査に参加した。調査参加者のうち男女はそれぞれ10人を占め、平均年齢は49.5歳、地域包括支援センターにおける平均経験年数は7.6年であった。

質的機能分析では、48の概念と17のサブカテゴリーが生成された。サブカテゴリーから、【喪失のインパクト】、【理想とのギャップ】、【違った景色】、【生前のエピソード】、【周囲のサポート】、【職場の風土】の6つのカテゴリーが生成され、そのうち【喪失のインパクト】、【理想とのギャップ】、【違った景色】の3つが中心のカテゴリーを形成した。中心のカテゴリーでは、支援対象を喪った体験に際して感じられた心の動きに始まり、支援のプロセスを思い起こしながら思案する模様、そして体験を総括し自身の支援対象への関りを見直すに至る流れが含まれている。

計量テキスト分析では併合水準によりクラスターを設定し、コンコルダンス分析から各クラスターに命名を行った。各クラスターを構成する語とその使用されている文脈から、【価値観の投影】、【職場のサポート体制】、【喪失の観測レンズ】、【自己評価と点検】、【自分を出せる関係性】の5つのクラスターを得た。

分析によって得られたカテゴリーとクラスターを比較した結果、意味内容において大きな矛盾がなく統合できるものとして成立していることがわかった。

5. 考察

支援対象を喪った社会福祉士は、周囲のサポートを手掛かりにしながら自身の支援を見つめ直し、自身の関りを再点検する円環的な循環構造を体験する。社会福祉士は「私」の視座から現実世界を意味構成する。自身の価値観や現実のとらえ方が変化するからこそ景色が異なって見えるものであるよう思われる。

山本（2014）は、喪失体験そのものには自身の認識する世界を作り変えるインパクトがあると説く。また大賀（2018）は死を考えることについて、社会的交互作用であるケアを通じ互いの存在、そして自身の存在に価値を見出す意義を説明する。自他の尊厳を再確認しながら自身の世界を新たにし続ける変化を継続するプロセスを通じ、社会福祉士は支援対象を喪っても職業を継続し支援者で在り続けることができたと言えるだろう。